

## 近代化と地域環境の変貌に関する一考察

——神立春樹著『明治文学における  
明治の時代性』をめぐって——

大 塚 利 昭

### 1 はじめに

近年、いわゆる社会の成熟度の進展に伴い、現代人の心のよりどころとしての景観をはじめとする地域環境のあり方が問われている。それは、建築物や土木構造物のデザインをどう処理するかとか、都市計画の用途地域をどう設定するかといった技術上の問題だけでなく、歴史や文化を含めた人文的景観や地域の自然環境の果たす役割をどのように認識し、それらをいかに守り、育ててゆくかといった文化政策、社会政策上の課題をも含んでいる。

社会とそれを取り巻く環境との間の一連の関係を地理学者の A. ベルクは次のように分類した。<sup>(1)</sup>

- ①生態学的関係（呼吸する空気、等）
- ②技術的關係（農業による居住域の整備、等）
- ③感覚的關係（環境の認知と表象）
- ④価値論的・認識論的關係（環境に関連する諸価値、諸概念）
- ⑤政治的關係（整備・開発における社会の選択を決定する権力の働き）

この分類に従えば、人文的景観保全の問題は①、②でいう人の生存、生活を可能とするような環境条件の水準を超え、③から⑤に至る人間の精神活動

及び社会行動上の課題であることに思い至る。

このほど岡山大学経済学研究叢書として神立春樹教授の論著『明治文学における明治の時代性』が出版された。日本経済史の研究者として神立教授（以下、著者と称する。）は日本の産業革命期研究を、「産業編成論」、「地域編成論」、「生活編成論」の三部構成によって構想し、それらのいずれかに分類される多くの研究成果を発表してこられた。今回の書物は、産業革命期研究で対象とした明治という時代を文学作品を利用して把握を試みようとする新しい形の研究である。著者の言によれば、「研究の別の面からのとりまとめといえる」ものであり、前記三部構成の中では、地域編成論、生活編成論の両方の性格を帯びた書であろうかと思う。

かつて、『戦後村落景観の変貌』（1991年）を著した際に著者は、木村礎氏の村落史研究における村落景観論、勝原文夫氏の景観論者としての生活的風景論を踏まえ、近代史研究者としての自身の景観研究の意味について次のように記した。

「現下に行進している村落景観の変貌は、それが農業生産者、農民の生産と生活の場である農業集落の変貌であり、農民の生産と生活が大きく変化していることの反映である。（中略）当面する村落景観研究は、このような歴史的転換を見極める作業である。<sup>(2)</sup>」

今回の書物は序章を含め全8章からなり、各章で徳富蘆花、島崎藤村ほかの小説・随筆集と詩人の宮崎湖処子らによる詩集の計8作の文学作品を題材として、明治期の都市や農村に生きた人々の生活とそれを取り巻く地域環境の有り様を個々の作品の具体的な表現を用いて描き出す試みがなされる。もとより本書は経済史に基本的な視点を置いた書物であるが、歴史や文化を包含した人文的景観や自然環境を含めた「地域環境」のありかたに関心を抱く私としては、著者が描こうとした明治の時代性の中でも、都市及び農村における地域環境の面からこの書の特徴や意義を探ってみたいと考える。以下、まず内容を概観した後に私見を述べ、本書の紹介とさせていただきます。

## 2 内容の概観

本書の章立ては以下のとおりである。

### 序 章

第1章 蘆花徳富健次郎『みゝずのたはこと』における東京近郊農村

第2章 田山花袋『田舎教師』における北埼玉地方の農村

第3章 島崎藤村『千曲川のスケッチ』と佐久の村々

第4章 宮崎湖処子『抒情詩』－その時代性

第5章 田山花袋『東京の三十年』における明治の東京

第6章 尾崎紅葉『金色夜叉』－その時代性

第7章 徳富蘆花『不如帰』における時代描写

あとがき

序章では、本研究の著者自身の研究史上の位置付けと本書の内容の概観がなされるとともに、幾つかの先行研究の成果が簡潔に紹介される。なお、本書で取り上げた作品はいずれも明治末期から大正初期に書かれたものであること、各作品の著者がそこに住むなどその地を熟知していること、そして、著者の神立教授自身がそこに住んでいたことがある、あるいは調査などでその地をよく知っていることを条件に選定したとの説明がなされる。

第1章では、大正2年（1913年）刊行の随筆集『みゝずのたはこと』で徳富蘆花が描いた東京府北多摩郡千歳村粕谷（現在の世田谷区粕谷）の明治末期の田園風景、生活の描写により当時の農村事情を把握する試みがなされ、第2章では徹底した現地踏査による「小説地理」的手法で小説を書いた田山花袋が明治42年（1909年）に刊行した小説『田舎教師』を題材として明治期の北関東の自然や農村の状況が描出される。『田舎教師』が描く北埼玉地方はかつて著者が農村織物業を対象とする研究のフィールドワークを行った場所でもあり、役場資料等の調査の結果、花袋の小説の描写の的確性を強く印

象づけられたとの付記が「あとがき」にある。花袋の作品は第5章の分析にも用いられ、こちらは、9才からの丁稚奉公を端緒に東京の30年間の変化を子細に見てきた経験をまとめた回想録『東京の三十年』という大正6年（1917年）刊行の書物である。

第3章では、信州小諸を舞台にした島崎藤村の紀行文集『千曲川のスケッチ』の叙述を引用しつつ、養蚕業を柱とした当時の佐久地方の産業構成と農村の有り様が紹介される。第4章では国木田独歩、松岡（柳田）国男、田山花袋ら計6人の文筆を志す若者の創作詩で編んだ詩集『抒情詩』から明治20年代の東京に暮らす青年の心理を読みとる試みがなされる。

第6章、第7章では「近代日本の二大大衆小説」と称される紅葉の『金色夜叉』と蘆花の『不如帰』を題材に時代や社会の描写の状況が検討され、一般的には家庭の出来事を描いた「家庭小説」と言われるこの両作品が、実は日露戦争の勝利に浮かれた日本の、まさに当時確立した資本主義・官僚制度＝高等教育に対する文士的批判であり、とりわけ後者は家族制度、軍部・政商に対する批判の書としての性格を有することが指摘される。

### 3 当時の地域環境と現代からのパースペクティブ

まず、地域環境を論ずる際の基本的な語句である、「風景」と「景観」という言葉について整理しておきたい。勝原文夫氏は、「風景」も「景観」もともに主体と客体の作り出す関係概念であり、厳密に言えば「風景」の場合は主体に重心があり、「景観」の場合は客体に重心があるとする。それを踏まえて、「景観」の方は視覚による享受をもっぱらとするが、「風景」の方は歴史的、社会的存在である人間が、視覚のみならず他の四感（聴覚、嗅覚、触覚、味覚）すべてを動員し、その社会の歴史、コミュニティの雰囲気までも包み込んだ形で心身全体をもって、全包的に客体を享受すべきものと考えられることを指摘する。<sup>(3)</sup>以下、この整理に基づいてこれらの用語を用いる

が、著者が本書で扱っている景物の描写の性質は、依拠する資料が文学書ということもあり、主には知覚する主体の人間の精神性が投影された「風景」としての描写が多いと私には感じられた。<sup>(4)</sup>

次に、本書の中から具体的な地域環境の描写の例を引用してみたい。紙面の制約から代表的な一例にとどめるが、徳富蘆花が『みづのたはこと』の中で描いた明治末期の東京郊外、東京市の西約三里にある千歳村の情景は以下のとおりである。

秋の田園詩人の百舌鳥が、高い栗の梢から声高々と鳴きちぎる。栗が笑む。豆の葉が黄ばむ。雁来紅が染むを相図に、夜は空高く雁の音がする。林の中、道草の中、家の中まで入り込んで、虫と云う虫が鳴き立てる。早稲が黄ろくなりそめる。蕎麦の花は雪の様だ。彼岸花と云う曼珠沙華は、此辺に少ない。此あたりの彼岸花は、萩、女郎花、嫁菜の花、何よりも初秋の榮を見せるのが、紅く白く沢々と網縷を靡かす様な花薄である。子供が其れを剪つて来て、十五夜の名月様に上げる。(p. 37)

ここには経済活動に直接かかわる意味での生産的な要素はほとんど書かれていない。そのかわりに、当時の都市近郊の生物相の豊かさと、そうした環境と交感しつつ営まれていた人々の生活ぶりが描写されている。すなわち、クリの実がはじけ、畦畔に栽培したダイズ等の豆の葉が枯れ始める頃、都市郊外の代表的な野鳥であるモズが自らの冬季のテリトリー（なわばり）宣言である「高鳴き」を開始し、雁来紅と称されるハゲイトウが葉を赤や黄色に染め上げると時を同じくして、かつては日本中で見られたが、今は激減して天然記念物の指定を受けているマガン（あるいはヒシクイ）が北方から群で渡来し、彼らの甲高い鳴き声「雁音」が夜空に響く。コオロギやカネタタキといった直翅目の昆虫は家屋の中にまで入り込んで秋の夜長を情緒のある金属的な音で鳴き通す。稲が色づく頃、白いソバの花は雪景色を彷彿させ、秋の七草の中のハギ、オミナエシ（野生種としては現在の人里では希な種）、ヨ

メナ、ススキが咲き乱れ、これらの野花を子供達が摘み、十五夜の月見の献花に用いる…。若干言葉を補って解釈すれば、概略このような明治末期の秋の農村風景が描写されている。

この箇所に限らず、『みづのはこと』には随所に当時の都市近郊農村の地域環境が描かれている。それは、ヨーロッパ的教養によって研がれた眼で豊かな自然の文学スケッチをよくする蘆花のこの作品が後年、「自然との対話の到達点」と評された所以であろう。そして、ここに描かれたのは明らかに日本における産業革命の発端から現代にいたるまでの、百年に及ぶ都市・農村の改変と変貌のスタートに当たる時期の都市郊外の地域環境と人のかかわりでもある。人間と自然環境の関係という点で言うと、明治期の産業革命は水稻農耕による農耕社会の出現と並んで2つの変化点として画期を成すものであり、<sup>(5)</sup>近代的な産業社会に突入したばかりの、いまだ前代の雰囲気の色濃く残す日本の風土や自然環境を把握することは、その後の激流の如き産業化の流れが何を生み出し、何を消し去っていったかを考える上で非常に重要であると思われる。

著者の記述にもあるとおり、この書は、大都市膨張と自然破壊に警告を發した鋭い文明批評としての性格をもっており(p.18)、こうした観点から都市郊外の地域環境をとらえた視点は、現代の環境に対する視点にも通じるものがある。こうした意味で、この作品には現代から明治を見たときのパースペクティブ・遠近感をより正確なものへと高める機能が内包されているように思う。

また、この蘆花の一節が描出したような人為と自然が共存的な関係を保っていた平穏な世界は、いわゆる農業の機械化・化学化、耕地整理や圃場整備が行き渡る前の、たおやかな日本の農村や都市近郊の地域環境を知るための貴重な歴史資料でもある。このような近郊農村に対し、「東京が大分攻め寄せて来」て、東京の人口「二百万の人の海にさす潮ひく汐の余波が村に響いて来る」ようになり(p.40-41)、やがては電鉄会社が墓地用地買収のため、

すさまじい土地買収攻勢をかけ始め、都市郊外の農村は次第に姿を変えていく様子を本書は『みづのたはこと』を用いて紹介している。

本書の巻末で著者が述べる「1934年生まれの私が記憶にある（昭和）30年代半ば頃の東京は意外に明治時代と連なる東京であったと思われる。」（p. 252）という述懐と、同じく著者の、「1950年代半ば頃からの都市化の波は、蘆花が描いた当時のそれとは比較にならないほど、大きく、高く、激しかった」（p. 52）という指摘を合わせてみれば、近代から現代への地域環境の変貌のスピードは一様でなく、昭和30年以後の東京の都市化が明治・大正期にも増して急激ですさまじいものであったことを思い知らされる。

#### 4 本書の意義と継承すべき研究課題

「日本は、数多くの公害防除の戦闘を勝ち取ったが、環境の質を高めるための戦争ではまだ勝利をおさめていない」という1977年に OECD が日本の環境政策について論じたレポートにおける指摘は、20年を経た今日でも意味を失っていない。現在までわれわれの社会は環境の質の向上に関して、とりわけ経済の振興や開発の推進との関係では劣後の価値しか置いてこなかったのは事実だろう。そのことを昨今の都市部の犯罪の多発、その内容の凶悪さと直接結びつけることは議論としては早計のそしりを受けるかもしれない。しかし、現代人、とりわけ青少年の不安定な心の有り様を考えると、情緒的とか主観的とか言う表現で従来の社会科学の枠外に押し出されていたものの重要性を再認識すべき時が来ていることを痛感する。物質的な豊かさを過度に指向し、数字や合理性で証明できないものは非科学的だと捨象してきたことの恐ろしさに思いを致すとともに、主観の領域に分類されてきた事象を学問の領域に引き寄せる試みをもっとなされるべきだと思う。それは、環境哲学の研究者の次のような表現からも妥当するのではないだろうか。

「空間の変容が人々の心の変容にどのようにかわるかは、明らかに因果的

説明の外にある。少年の凶悪犯罪が殺伐としたニュータウンを舞台として起きたとしても、空間の意味と少年の心という、いずれも非物理的なもの同士の関係の因果関係を突き止めることはできない。それは、空間の意味という非物理的なものと、少年の心というやはり非物理的なものとの関係にかかわるからである。科学は、このような空間の「意味」と「心」の関係を検証できるようなシステムになっていない。それにもかかわらず、わたしたちは、空間と心の間を察知する。人間の経験はこの身体空間を舞台とすることをその成立条件としているからである。このことは必然的であり、論証の余地のない真理である。<sup>(6)</sup>」

本書に話題を戻すと、著者がこの書でとった方法は著者本来の統計データを用いた分析による地域社会の描出の手法とは異なる。しかし、文学作品がもつ訴求力を基礎に、数的な分析とは異なった視点から地域環境の歴史的把握や失われた地域環境の復元を試みることに十分現代的な意義があることは本書から十分読みとれる。こうした主観と客観をつなぐ手法の高度化、緻密化は、今後一層求められる手法だろうと思う。著者のこの貴重な試みを後に続く者が受け継ぎ、人文的景観はもとより自然生態系の保全、そして、何よりそこに生きる人間が実感できるような環境の質の回復・向上を実現するよう研究成果を蓄積し、現代の環境政策に活用することが今求められているように思う。

また、本書を読み進めると、著者の人間への温かい眼差し、ヒューマニズムが通奏低音のごとく背後に響いているのを感じる。「日本の農村は貧しかったのです。その中で日本の近代化はスタートしたのです…。」日本経済史のゼミナールの中で何度か神立教授の間わず語りのつぶやきを耳にしたが、それは明治の日本人への哀惜にも似た思いであったろうと今思う。最後に、本年3月末をもって退官される神立教授から賜った研究上のご指導・ご厚情の数々に心から感謝申し上げ、本稿を閉じさせていただく。



注

- (1) オギユスタン・ベルク『風土の日本 自然と文化の通態』筑摩書房, 1988年, 129-130頁
- (2) 神立春樹『戦後農村景観の変貌』御茶の水書房, 1991年, 11頁
- (3) 勝原文夫『農村の生活風景』(『暮らしが景色をつくる ニッポン型景観形成の源流』農文協, 1995), 8-9頁
- (4) 本稿でいう「地域環境」は前述のとおり, 風景や景観に加えて, 生物と自然環境を体系的につなぐ生態系も包含した語として用いている。
- (5) 根木昭他『田園の発見とその再生』晃洋書房, 1994年, 28頁
- (6) 桑子敏雄『環境の哲学』講談社学術文庫, 1999年, 273頁。なお, ここでいう「身体空間」という語は, 特定の空間に生きる人々の個別的な経験に裏打ちされた豊かさや愛着を持つ空間という意味で用いられている。(同書212頁)

(岡山市教育委員会文化課)

(『明治文学における明治の時代性』岡山大学経済学研究叢書第24冊, 1999年, 岡山大学経済学部, 御茶の水書房, 253頁)